

小惑星 2879 番 “Shimizu”

浦 田 武*

1984年5月15日付のMPC 8801号で小惑星 2879 番の 1932CB1 に “Shimizu” と命名された事が正式に発表された。

清水真一氏。あの行方不明であったダニエル周期彗星の写真検出者であり、現在では猫も杓子も天体写真という日本のアマチュアの神格的存在である清水真一先生(1889年生れ)の事である。新小惑星は替越ながら先生の功績を後年に長く伝えるために命名させていただいたものである。

先生の華やかな天文経歴に関しては既に多くの紹介記事があるので重複を避け、ここでは“(2879) Shimizu” 誕生までの経緯を述べる事にする。

もともと 1932CB1 は 1932年2月14日、ドイツ・ハイデルベルグ天文台の K. Reinmuth 氏によって発見された小惑星で発見光度は 14.5 等級、同年3月26日まで計5夜の観測がなされたまま行方不明となってしまった星である。その後、この小惑星はクリミア(ソ連)やヨーロッパ南天文台で何回か別個の天体として観測され、1928JA, 1975RG1, 1978EV6, 1980TN1 という仮符号を併せ持つことになった。

1932CB1 の暫定軌道要素はスミソニアン の C. M. Bardwell 氏が発表しているが、これをベースとして数

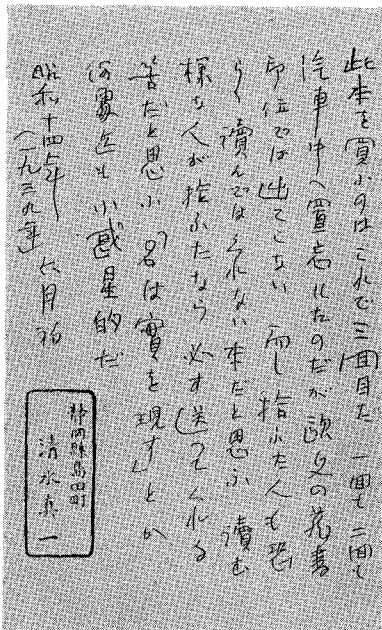
万個にも達している未確定小惑星の観測との照合を行ない、上記の仮符号で呼ばれていた星達が総て同一天体であったという事実を筆者が突きとめたのは、1932年の発見から半世紀を経た 1982年初冬のことである。

この結果に基づき、5大外惑星の摂動を加えた位置推算表を発表した筆者に呼応してくれたのが芸西観測所の 関 勉氏である。

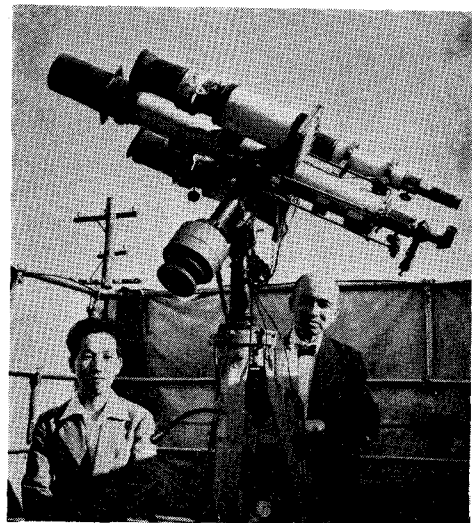
翌 1983年1月18日、1932CB1 は予想どおり関氏の 60 cm 反射鏡のプレートの中央にその姿を現わした。この観測によって 1932CB1 の軌道は確実なものとなり、小惑星 2879 番が誕生する事となったのである。

小惑星の命名は番号登録後に原則として発見者が行なう事になっており、この例では Reinmuth 氏はその権利を持つ筈であったが、番号登録時に既に同氏は不帰の客となっており、結局軌道計算をただけの筆者の許に命名権が転がり込んだという次第である。

鳥田市の繁華街の中央近くで経営される薬局の2階の広い書齋で万卷の書に囲まれ悠々自適の日々を送られる清水水先生を初めてお訪ねしたのは 1968 年頃であったと記憶している。無論駆け出しのひよっ子の筆者では先生も相手に不足ありというのが本音ではなかったろうかと推測されるが、それでも何時お伺いしても歓待していただき、得意の軽い洒落を混え、鮮やかに綴る話術に思わず時の経つのも忘れ、夕食のお世話にまでなった事も



岩波全書「小惑星」の扉に記された一文



知新観測所での清水真一氏、廣瀬秀雄氏と共に
(昭和15年8月18日)

* 三保園ホテル Takeshi Urata

何回かである。

今、筆者の手許に例の岩波全書の「小惑星」——平山清次著——が2冊ある。一冊はつい最近、やはり小惑星の軌道の研究をしておられる大石英夫氏から譲っていただいたものだが、残りの一冊は清水先生からもう数年間もお借りしたままになっているもので、この本の扉に先生独特の筆で写真のように書いてある。先生らしい一文なのでご本人の許しもないまま独断でご紹介する次第だ。実は内緒話がある。今日(6月10日)現在、当の清水先生自身に(2879) Shimizu 誕生の話はまだお耳に入れてないのである。多分先生の事であるから

~~~~~  
書 評  
~~~~~

The New Solar System

J. K. Beatty, B. O'Leary, A. Chaikin 編

(Sky Publishing Cooperation, Cambridge, 1981年)

この20年ほどの間に惑星探査機のお蔭で太陽系天体の研究は飛躍的な進歩をとげた。また、地上の観測技術の向上も天王星の環や冥王星の衛星などの発見を導いた。本書は、このようなデータをもとに現在知り得る太陽系の新しい姿を示してくれる。

構成は20章に分かれ、内容は、太陽、惑星間空間、惑星各論、環、彗星、小惑星、隕石、大型衛星、火星の生命探査、太陽系の起源など多岐にわたる。各章を担当しているのはほとんどがNASAの惑星探査計画に実際に携わった研究者であり、多くの章でボイジャー、パイオニアなどによる成果が詳しく紹介されている。B. A. Smithは第11章“The Voyager Encounters”で、ボイジャーが木星・土星に接近して惑星・衛星の表面の写真を次々と送信してきた当時のNASAのスタッフの興奮をリアルに描いている。

惑星の研究は、今では惑星探査機による成果をふまえて、比較惑星学という新しい分野のなかで大きく発展しているが、本書も全体としてこのような立場で記述されたものが目立つ。J. W. Head, IIIとJ. B. Pollackがそれぞれ書いている第5章“Surfaces of the Terrestrial Planets”と第6章“Atmospheres of the Terrestrial Planets”はその典型だといえよう。一方、探査機のまだ到達していない天王星以遠の惑星については、D. Morrison and D. P. Cruikshankが第16章“The Outer Solar System”でまとめて論じているが、CCDを用いた近赤外の最近の観測なども紹介しているものの、その詳しさは当然とはいえ、探査機のデータにもとづく他の惑星・衛星の記述には遠く及ばない。天王星についての新たな一章を加えるには、1986年のボイジャーの接近ま

事前にこのプランを聞けば首をヨコに振るのは必定、というわけで、静岡市在住の柴田宸一氏と相談の末、半ば極秘裏にコトを運んでしまったのである。

しかし、内緒話もそろそろ打ち明け話に替える時が来たようだ。しばらく御無沙汰をしている事でもあるし、そんなこんなのお詫びを兼ねて近日中に島田のお宅にお邪魔するつもりでいる。なお蛇足ながら付け加えると、先生はアマチュア天体写真の功績により、本会の神田茂記念賞を受賞しておられる(本誌1976年8月号アルバムおよび244頁、9月号276頁を参照)。

で待つ必要があるのだろう。

N. W. Hinnersは第1章“The Golden Age of Solar System Explorations”で、アメリカが太陽系探査計画を進めた主な理由は、国威、夢、知識、応用の4つだったとして、これまでの成果を振り返っている。また、「黄金時代」を築く原動力となったNASAが、国家予算という枠のなかで緊縮財政の煽りからこれまで数多くの計画変更を余儀なくされてきたこと、さらに将来の計画の見通しもますます厳しくなるであろうことなどの事情も冷静に分析している。このような状況にこそ、探査計画をさらに進めていく決意が必要なのだと思っているのが印象に残る。

本書はカラー写真や図が豊富で、それを見るだけでも十分に楽しめるし、太陽系天体についての一定の知識を得ることができる(ただし、第6章の各惑星の大気温度の高度分布図、地球・火星の歳差の図など、若干のミスがみられる)。「まえがき」ではこの本の性格について、textbookでも“coffee-table”volumeでもなくその中間を意図したものだとしているが、むしろその両方の読み方のできる本だということができよう。ある意味では、本書はアメリカの納税者に太陽系探査の成果を伝え、理解を求めるための『一般向の報告書』といえるかもしれない。

(岡崎 彰)

星の色 地人選書 6

大沢清輝 著

(地人書館, 昭和59年5月20日刊, 1,900円)

趣味にでも研究にでも、まだ1回も望遠鏡を使ったことのない天体物理学の理論屋の筆者にとって、観測ということ自身の本質的な理解がないものだから、観測のテクニックや苦労話を伺う機会があっても、中々に観測そのものの全体像を把握するのはむづかしい。本書に観測そのものへの理解を期待したが、それは無理なこと、むしろ「観測家への理解」が少しばかり深まったのでは